魔法少女リリカルほむら

アイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルほむら

【Ｎコード】
Ｎ１７７３Ｕ

【作者名】
アイン

【あらすじ】
暁美ほむらは、唯一人の親友、鹿目まどかを“死の運命”から救うために、何度も何度も同じ時間軸を繰り返していた。そして新たなループが始まり目を開けると、そこは見た事のない病室で、その手には指輪状態で存在するはずのソウルジェムが無かった。
そして暁美ほむらは異世界の魔法少女に出会う。
――魔法少女リリカルほむら始まります……！

◆◆この短編は「魔法少女まどか☆マギカ」と「魔法少女リリカル

なのは」をクロスした物語のプロローグ部分です。連載するかは考え中ですが、プロローグを書いてみたので、投稿しました。当然ですけど両方の作品を知っているとより楽しめますが、一応知らない方でも読める様に書いたつもりです。何か一言でもいいので、是非皆様の意見・感想等をくださいませ。よろしくお願いします！◆◆

（前書き）

初めましての人は初めまして！　普段はネギまのＳＳを書いてるアインと申します。

何故か最近、初めてリリカルなのはを見て「まどか☆マギカ×リリカルなのは」を思いついたので書いてみました！

それでは、どうぞー。

追記
現在　７／１（金）連載開始に向けて鋭意執筆中です。見かけたら読んでやってください。連載開始日は早まる可能性はありますが、最初の投稿は１８時過ぎあたりを予定してます。

追記２
同じタイトルで連載開始！

私、暁美(あけみ)ほむらは心臓の病気でずっと入院していた。だから転入した中学校で出会った少女、まどか――鹿目(かなめ)まどか、彼女は私の初めての友達だった。そして彼女にはある秘密があった。魔女を討つ魔法少女であるという秘密が。

まどかは巴(ともえ)マミという先輩と共に魔法少女として戦っていた。そして、巴マミが戦場に散り、まどかはたった一人で最悪の魔女『ワルプルギスの夜』に挑む。私はまどかと一緒に逃げ出したかった。だけど彼女は言った。

――もうワルプルギスの夜を止められるのは、私だけしかいないから。

――それでも、私は魔法少女だから……みんなのこと、守らなきゃいけないから。

――ほむらちゃん……私ね、貴方と友達になれて嬉しかった。

――あなたが魔女に襲われた時、間に合って……今でもそれが自慢なの。

――だから魔法少女になって、本当に良かったって……そう思うんだ。

――さよなら、ほむらちゃん……元気でね。

そう言って彼女はワルプルギスの夜に挑み……死んでしまった。

私は、私なんかを助けるよりもまどかに生きていて欲しかった。だからその時、白い悪魔(キュゥべえ)の言葉に耳を貸してしまったんだ。

『暁美ほむら。君のその祈りの為に、魂を賭けられるかい？　戦いの定めを受け入れてまで、叶えたい望みがあるなら、僕が力になってあげられるよ』
『あなたと契約すれば、どんな願いも叶えられるの？』
『そうとも。君にはその資格がありそうだ。教えてごらん……君はどんな祈りで、ソウルジェムを輝かせるのかい？』

『――――私は……私は、鹿目さんとの出会いをやり直したい！彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守る私になりたい！』

そうして私は魔法少女になった。それと同時に、これが私と“運命”との戦いの日々の始まりだった――――

次に目覚めた時、私は病院のベットの上だった。そしてまどかとの出会いをやり直し、彼女を守る為に戦い始めた。初めは足手まといだったけど、爆弾を作り出し徐々に戦えるようになってきた。だけどワルプルギスの夜との戦いでまどかが魔女になってしまう。

その時、気付いたんだ。魔法少女が絶望染まった（ソウルジェムが濁り切った）時、魔女になるっていうことに――――

二度目のループ、私はみんなに魔法少女の真実を伝えた……だけど誰にも信じては貰えなかった。今までは唯のクラスメートだった少女――美樹（みき）さやかがこのループでは魔法少女になっていた。彼女に言われて、私は爆弾以外の新たな武器を求めた。時間停止の魔法を使って銃器を盗み、それを武器とした。
それから、美樹さやかが魔女と化し、私はまどかを守るため彼女を殺した。そして魔法少女の真実を知った巴マミが発狂し、共に戦っていた佐倉杏子（さくらきょうこ）を撃ち殺し、私にも銃を向けてきて、その時まどかが巴マミを射殺した。

最悪だった……もうすぐワルプルギスの夜が来るのに……。

二人でワルプルギスの夜に挑み、私達二人のソウルジェムは濁り切ってしまった。その時まどかは隠し持っていたグリーフシードで私を助ける。そしてまどかと約束を交わした。

――キュゥべえに騙される前のまどかを助ける。

――何度繰り返すことになっても、絶対にまどかを救ってみせる！

そして再びループし、振り出しに戻り、私は決意した。

私が未来を話しても、誰も未来を信じない……誰も未来を受け止められない。だったら私は――

――もう誰にも頼らない。

――誰に分かって貰う必要も無い。

――もうまどかに戦わせない。

――全ての魔女を私一人で片づける。

――そして、今度こそワルプルギスの夜をこの手で！

だけど現実は無常だった。ワルプルギスの夜は強く、私一人で倒せなかった。そして白い悪魔（キュゥべえ）はまどかに語り掛ける。

『僕と契約して魔法少女になってよ！』

私の悲痛な叫びも空しく、まどかは魔法少女になってしまい、ワ

ルプルギスの夜を倒した彼女は魔女と化した。

再び私はループした。

繰り返す。何度でも繰り返す。同じ時間を何度も巡り、たった一つの出口を探る。貴方を、絶望の“運命”から救い出す道を……。まどか……たった一人の私の友達。貴方の……貴方の為なら、私は永遠の迷路に閉じ込められても構わない……。

そして、私は幾度となく同じ時間を繰り返した。まどかを救う――――唯それだけの為に。

◆・◆・◆・◆・◆・◆・◆・◆・◆・◆・◆

新たなループが始まり、私は目を開ける。そこに広がるのはいつもの病室ではなかった。周りを見渡すと、ベットの脇のテーブルにある物が目に付いた。いつもなら見滝原中学校の入学案内であるはずのそれは、私立聖祥大付属中学校という学校の入学案内であった。

訳が分からなかった。私立聖祥大付属中学校？　何故、見滝原中学校ではないの？　カレンダーを見ると来週の月曜日から転入することになっているらしい。そして、私の困惑にさらに拍車を掛ける事実に気付いてしまった。そう……その手にある筈のソウルジェムが存在しなかった。

状況に理解が追いつかず、フラフラと病室を出ると、そこはやはり見知らぬ病院の廊下だった。そのままフラフラと歩き、待合室らしき場所へと辿り着く。

「――何なのよ……」
「どうかしたん？」

不意に掛けられた声に振り向く。声を掛けてきたのは、足が不自由なのか車椅子に乗っている茶髪の少女だった。彼女は私が閉口しているともう一度声を掛けてきた

「フラフラ歩いとったから、ちょっと気になったんよ」
「……別に、大丈夫よ」
「ならええんやけど……。何や、よう分からんけど、何かあったん？」
「……貴方に話す事なんかないわ」
「……そんなら何も聞かへんよ。でももし、気が変わったら電話番号教えとくから、気兼ねなく掛けてきてええよ」

彼女はそう言って、電話番号と名前の書いた紙を渡して去って行く。彼女の向かう方向には、彼女を『はやてちゃ～ん』と呼びながら、手を振っている女性がいる。恐らく保護者なのだろう。思わず紙を受け取ってしまったが、その紙を握り潰してポケットへと突っ込み、ひとりごちる。

「……貴方なんかに出来ることなんて、何もないわ」

――そう、私に信じられる人なんて誰もいないのだから。唯一の親友、鹿目まどか以外には……。

時間は進み、私は状況を良く理解できないまま私立聖祥大付属中学校へと行く日になった。
この数日で分かったことは、この町は見滝原市ではなく、海鳴市ということだ。まどかの家も探してみたが見つけることは出来なか

った。それでも学校へ行けば、まどかに会えるかも知れないと、一縷の望みをかけて転入先の中学校へと向かっている。

◆・◆・◆・◆・◆・◆・◆・◆・◆・◆・◆

「暁美ほむらです。よろしくお願いします」

教室を見回しても、まどかはいない。私に話しかけてくるクラスメート達にまどかの事を聞く。答えは揃って『知らない』。この学校にはまどかは存在していなかった。

初日から学校を早退する訳にもいかず、放課後になると、クラスメートから誘いを受ける前に教室を飛び出した。

思えば、今回のループは全てが可笑しかった。知らない病室から始まり、知らない病院。出会うはずのない少女との出会い。知らない学校への転入。極めつけは、指輪状態で存在するはずのソウルジェムがないことだった。試しに時間を停止させてみようとしたが、魔法少女としての力も使えなくなっていた。

まどか……。何処……貴方は何処にいるの？

私は、まどかがいないという絶望から、フラフラとあてどもなく歩き続け、気付くと辺りは暗くなっていた。

家族はいないけれど、家が無いわけではない。でも、私はもう空っぽだった。救うと誓った人もいなければ、その為に手に入れた力も無い。まどかが居ないなら、私は何の為に存在しているのだろうか？

そんな時、突然世界から光が消えた。その直後、事故でも起きたかのような大きな音が夜の闇に響いた。

これは、結界なの？　でもソウルジェムがないからか、魔女の気配を感知することはできない。……それに力を失った私じゃ如何仕様も無い。

――でも、もしこれが結界で、さっきの音が誰かが魔女と戦う音なら……巴マミや、美樹さやか、佐倉杏子が戦っているかも知れない。彼女達に護られたまどかと会えるかも知れない。そんな淡い期待を抱きながらさっきの大きな音のした場所へと駆けて行く。

その場所に辿り着くと、煙が上がっていて良くは見えないが、道路のアスファルトが抉れ穴が開いていた。さっきの音はその衝撃音だったらしい。

そして煙が晴れると異形の化け物と一人の少女が対峙しているのが見えた。

「我、使命を受けし者なり。契約の下、その力を解き放て！　風は空に、星は天に。そして不屈の心は、この胸に！　この手に魔法を……レイジングハート、セットアップ！」

【Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　ｒｅａｄｙ．Ｓｅｔ　ｕｐ．】

一人の少女が何か呪文の様な言葉を唱える。そして、その言葉と共に桜色の光が天を貫く柱の様に立ち昇る。

「なんて魔力だ……落ち着いてイメージして！　君の魔法を制御する魔法の杖の姿を！　そして君の身を守る強い衣服の姿を！」

「そんな……急に言われても……えーと、えーと……とりあえず、これで！」

……少女とフェレット？　が会話していた。あの生物、キュゥべえの亜種か何かかしら？　そんなことを考えていると、少女自身も光に包まれた。そして光が晴れた時、先程の少女が機械みたいな杖を構え、まるで私の知っている魔法少女の様に衣服が変化して現れた。

これが唯一の親友、鹿目まどかを“死の運命”から救う為に、魂の牢獄とも言うべき永遠の迷宮に身を投じた私の“運命”を変えることになる、異世界の魔法少女との出会いでした。

――――魔法少女リリカルほむら始まります……！

（後書き）

あらすじでも書きましたが、これは物語のプロローグ部分です。

この先は、ほむらは色々あって、この世界でも異質な存在である魔法少女のなのはと行動を共にするようになります。そして、なのはと行動する内に、徐々に凝り固まったほむらの心が解かされていきます。

フェイトの登場。なのはが落とされ、ほむらは失ってしまった力とは別の新たな力を求める。

その後の展開もざっくりとは考えてありますけど、かなり大雑把なので連載にするかは考え中です。

一言でもいいので、是非、感想・意見等をくださいませ。よろしくお願いします！

追記（前書きと同じ）

現在　７／１（金）連載開始に向けて鋭意執筆中です。見かけたら読んでやってください。連載開始日は早まる可能性はありますが、最初の投稿は１８時過ぎあたりを予定してます。

追記２

同じタイトルで連載開始！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1773u/

魔法少女リリカルほむら

2011年10月8日22時42分発行